Osaka University Knowledge Archive

Title	隠蔽の社会理論序説 : 儀礼的隠蔽とゴッフマン
Author(s)	阪本, 俊生
Citation	年報人間科学. 1987, 8, p. 77-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9002
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学人間科学部〔一九八七年二月〕
『年報人間科学』第八号七七頁―九六頁

隠蔽の社会理論序説

――儀礼的隠蔽とゴッフマン――

阪本俊生

隠蔽の社会理論　序説
——儀礼的隠蔽とゴッフマン——

序　隠蔽と社会学

隠すという行為は極めて社会的である。誰かが誰かからあることを隠す、あるいは、秘め事をするということを問題とするとき、このことは隠す主体の隠された他者との社会関係、また、その主体が他者各々に対してもつ社会関係上の配慮をぬきにしては考えられない。例えば、ある人はある事柄を家族のものには話すが友人には隠しておく。逆に、家族には内緒にしておくが親友には打ち明けることもある。隠すべき他者あっての隠蔽行為であるということ、その行為が社会において非常に一般的に見られることを考えるなら、それは社会学的に顧みる価値のある社会的行為であるといえるだろう。

隠蔽行為は、既にジンメルが『社会学(“Soziologie”)』において、その積極的意義を評価しているにもかかわらず、これまで社会現象の陰の部分としてあまり重要視されず、また、消極的、あるいは否定的にしかとらえられてこなかったという観がある。事実、隠蔽を主題として取り上げている社会学的文献は極めて少なく、また、それが研究の一部に於て触れられる際もその否定的側面のみに注目している場合が多い。しかし、その一方、現実社会においては、プライバシーが大きな社会問題としてしばしば取り沙汰されており、それが隠蔽と直結した問題であることを考えるとき、このことは現実のそして現代の問題であるといっても過言ではない。しかしここにおいては、プライバシーの実際について考えようと意図しているわけではない。そうした研究は既に数多く、そして深くなされていると思われる。むしろ、プライバシーを含み、そしてさらにその基底を成すともいえる社会的隠蔽行為の一側面ついて、社会学者ゴッフマンを通じて、基礎理論的に考察しようとしているのである。また、この試みは、同時に社会関係の一側面を論じることにつながる。なぜなら、社会関係の多くは、多かれ少なかれ、悪意のあるものもないものも含めたうえでの隠蔽行為の恩恵をこうむっているといえるからである。

しかし、ここでは隠蔽行為の全てに言及しようとしているのでは全くない。この中でふれることができるのは、個々人の〈外見に関する隠蔽〉だけである。言い替えれば、その各々が、社会的場面においてなんらかの外見をもつために、そして他者に見せるために行う隠蔽のみである。つまり、個人は多くの場合、なんらかの外見を通して他者との社会関係を営んでいるという一つの前提のもとに、そうであるが故になされる隠蔽のみを取り扱うのである。

I　信用のための隠蔽と儀礼的隠蔽

1　信用ある外見のための隠蔽

告白(confession)や脅迫(blackmail)などの隠蔽に関係の深い研究をおこなっている数少ない社会学者の一人、マイク＝ヘプワース(Mike Hepworth)は、その著作『脅迫（"Blackmail"）』の中で現代社会を「生活の諸側面において信用のあることの証拠の提供をいつもしていかねばならない・・・信用社会("credential society")である[1]。」と論じている。しかもこのことによって彼は、この社会が、他者からの外面上の評価、例えば評判や世評といったものにセンシティヴにならざるを得ないところであることを主張している。こうした社会が「被害者にとって信頼を失うことになる情報を利用して脅すことでなんらかの利益をうる[2]」犯罪である世評脅迫(reputational blackmail)が発生する基盤をなしているというのである。そして彼が実際に引いているイギリスの法制史の近現代における世評脅迫に対する世論や司法当局の意識の高まり、及び、立法化により、それが犯罪として確立された歴史はそのことの裏付けとなっている[3]。

こうした社会観に立つとき、隠蔽行為全体の中で特に外見に関わることの隠蔽が重要なポイントの一つとなる。つまり、一定の外見を他者に対して維持し、社会的信用を保つために隠蔽を行うということが、隠蔽を研究するうえでの一つの社会学的なテーマとなるということである。というのも、脅迫に対するイギリスの法的解釈がそれをただ単に個人の問題として取り上げるのではなく、「社会的危険として公式に認定」し（一八四三）、「国家への新たな脅迫」（一九一六）と見なしていることからもみてとれるように、「国家の第一のあるいは第二の機能を攻撃するのではなく、その個々のメンバーを傷つけることによって、・・・・・全体としての社会にとって有害になる行為と不作為とからなる一群の犯罪の一つ[4]」だからである。従って、外見のための隠蔽という問題は、外見というパースペクティブを通じて社会秩序一般の問題にも関わっているのである[5]。

それと関連して、現代において制度化されている他者の秘密を守る義務（隠蔽する義務）も存在する。守秘義務がそれである。守秘義務とは、医師、助産婦、弁護士、聖職者など、その職業がら他者の重大な秘密に接する機会の多いスペシャリストに課せられた、他者の秘密を秘匿する義務のことである。この義務は、たんに日常生活上の倫理的な観点から守られるべきであるというだけでなく、通常は法廷における証言拒絶権とむすびついた強力な権利としても効力を発揮する法的義務である。この制度の存在根拠は、主として、それら専門家の業務遂行を円滑化することで社会に有益となるということにある。しかし、その裏に、個人の秘密が守られることの社会的意味の重要性を推察できるのである。

このことを考える上でのポイントは、そこで守られるべきとされる秘密は、たいていはそれを託した個人の外見にとってスキャンダラスなものであるということ、つまりそれは隠されていても現実にはほとんど無害であるにもかかわらず、一度露見するとその影響は

個人一人の問題にとどまらず、その社会関係を通じて、より広く周囲の社会に波及してゆくということ、そして、この特権が、「公共の福祉の為に最も重大な義務(6)」である国民の証言義務に対抗しうるものだということである(7)。しかしここでは、このように託された秘密(entrusted secrets)を守る義務として、制度的に保護されている守秘義務が、手持ちの他者の秘密をばらすと言って脅す犯罪である世評脅迫とは、ちょうど対をなす関係にあるものだということだけを指摘しておくことにする。

2　露呈することが社会的にタブーであるが故の隠蔽

とにかく日常的にも、個人はその属するグループ（例えば家族）になんらかの混乱をきたすために、自らのイメージにかかわる事実を隠蔽することはよくあるものだ。しかし、外見のための隠蔽を考えようとするなら、もう一つ別の観点からも考えねばならないだろう。すなわち、個人が自分の外見を保とうとする場合のように、隠蔽行為が自主的に自己防衛的になされるというだけでなく、さらにそうすることが社会によって倫理的に要請されている場合もあるということである。例えば、初めて出会った人々と同席している中での余りにあけすけな態度は、エチケットに反すると見なされることがしばしばある。また、一三世紀半ばの神学者ペラルドゥスは、最大の罪であるプライドの二つの外面的特徴として、身を飾ることと身を露出することとをあげている(8)。そして、自己の本性を暴露する人間を激しい非難の対象としている。両方とも外見によって人の目を引くという点で共通しているが、隠しておくべきものを見せびらかすことによる罪という点でも共通している。秘密を倫理学的な観点から研究しているボック(Sissera Bok)は、隠すことの道徳的制約と同時に明かすことにも道徳的制約があると論じている。彼女は、自己暴露はあくまで選択的でなければならないという。このことは、多くの社会において秘密をコントロールする能力が道徳的に問われていること、また、沈黙は美徳であるという考え方が浸透していることに示される(9)。しかし、今世紀においては、その否定的側面のみが一方的に強調されてきたきらいがある。精神分析療法やエンカウンターグループなどはその典型である。しかしそうした「秘密の役割を引き下げる努力は、サルトルや非常に多くの他の人々が表明してきたような、人間のあいだの完全な透明性への幻想的な切望を反映している(10)。」と言えよう。（こうした自己暴露とは別に、彼女は、他者に関してもつ秘密の暴露についても、不当に相手のプライバシーに踏み込んだゴシップは特に非難すべきゴシップのカテゴリーに入れている(11)。）

これらのことは、一定の外見を与えるための隠蔽について、ただ単に個人がそれを自己保身やなんらかの政略の為に行うだけでなく、一定のものをふせておくべしといった社会全体からの要請が存在するのではないかという予感すら生じさせてくる。端的には外見において自らの性器や生理的行為を隠すといった社会生活上の基本的鉄則において明確に見られるこうした要請は(12)、そのような余りに自明な諸例に限定されるのではなく、人々がしばしば外見によって他者と接触せざるをえないが故に、より広範で多様な形をとって社会

生活に浸透しているのではないだろうか。「嘘は、関係を破壊すると同時に統合的要素である[13]」というジンメルの言葉を信じるなら、（嘘は隠蔽によって成り立つものであるので[14]）様々な社会関係は、隠すことによっても保たれているという側面を持つのではないだろうか[15]。そしてこのことは、先にあげた脅迫が社会的危険として認識されるに至ったという事実と無関係ではないであろう。いずれにせよ、これらは人々の社会的関係が、いかに、そしてどのように外見に負うているかを隠蔽行為を通じて知る上での一つの手がかりともなるのである。

3　信用の為の隠蔽、その二重の意味

しかしながら、これまで強調してきた、外見に関する隠蔽の二つの側面すなわち、都市化に伴う信用社会の興隆に起因するそれと、社会的要請によるそれとは、果して同質的なものなのだろうか。それらの明白な相違は、一つには前者が近代的な問題であるのに対し、後者は必ずしもそうでない、もっと過去からの問題ということにある。しかし、この点に関して、一つの例をもとにしてもう少し明らかにしたい。藤竹暁は、H・M・ヒューズの古典的な著作、『ニュースとヒューマンインタレストストーリー』から好適な例を引いている。

「スキャンダルは、小さな町の新聞（スモールタウン・ニュースペーパー）では記事にならない。そこでは、住民はお互いに深い関係でつながっており、スキャンダルの関係者があちこちにいるから、かえって公開することを禁じる社会的圧力が生まれる。見ており、知っているけれども、しかし言わないのが熟知している間柄の中で生じたスキャンダルなのである[16]。」

これは社会的要請による外見のための隠蔽の、いわば典型的な例である。しかし、それを同時に信用のための隠蔽だと言うことはできない。というのも、まず、この場合、隠しているのは、秘密を持つ本人だけでなく他者も知りつつそれに荷担しているからである。もし、それが実際の信用関係に関わる秘密ならば当然そうしたことは起こり得ないし、たとえ起こり得たとしても、それは一方の他方への信用という目的とは無関係なものである。事実、信用社会の典型である「大都市では、スキャンダルはニュースになる」のである。さらにそれに加えて、誰もが他者のことを熟知しているような狭い社会においては、大都市のように信用が重視されるなどということはそもそも考えがたい。ジンメルも言うように、信用は知と無知の中間段階であり、「完全に知っている者は、信用する必要はない」のである[17]。つまり、互いに熟知しているような小さな町では、信用は少なくとも二次的な問題でしかない。にもかかわらず生じてくる相互の隠蔽というのは、信用のためのそれとは異質なのである。つまり、それら外見のための隠蔽の二つの側面は、互いに表面上は類似していながら、大きな違いを持つ。

確かに、信用社会であるということと、外見の社会であるということとは、同一の社会現象のおもてうらである。互いに相手を熟知している場合は、信用は無意味であり、人々が互いの外見に依存して関係せざるを得なくなってはじめて、信用が社会的な価値として

重きをなす。従ってまた逆に、現代は信用社会であるからこそ、そこには外見の重要性も暗示されているのである。しかし、だからといって一定の外見を与えるための隠蔽を、こうした実質的な社会的信用との連関でのみとらえることは片手落ちであり、誤解へと導く。例えばプライバシーの問題はほとんどその本人の信用にひびかないにもかかわらず、他人には知られたくない事柄であることが多い。結局、外見のための隠蔽を考えるとき、しばしばそこに含まれる二重性を念頭におかねばならないということである。

信用とは、そもそも、現在の目的に照らしあわせて、経験的あるいは知識的に基礎づけられた合理的な考量の結果、相手に与えるものであり、逆に他者からのそうした基礎づけのもとで与えられるものである。従って、信用のための隠蔽は、当然そうした他者の合理的考量に対応したものとなる。ところがめんつを守るためといったような、なにかの道徳的価値観にもとづくような隠蔽の場合、それには合理的考量とは別次元のことが意味されている。つまり、それは社会の実、例えば相手との取引関係の維持または銀行から融資が受けられるか否か、の為の隠蔽ではなく、極めて形式的な問題、例えば個人の名誉の維持とか父親の家庭内での権威の維持など、に関わる隠蔽なのである。ところが、一般に社会的信用という場合、常にこれらの二重の意味が包含されているのである。融資を受けにきた男性が相手の銀行員に、その金の恥しくて隠しておきたい用途、例えば入れあげている女性に貢ぐといった、を隠すのには二つの理由がある。一つは、その男性の実質的な信用にかかわるということである。しかし、もう一つは彼自身の社会の成員としての倫理道徳的な体面が汚されるということである。そして相手の銀行員は、そうした事情に通じている場合も相手のめんつを傷つけないようにそのことをふせ、同じ丁重さをもって接することで、後者の理由からは相手を救済しながらも、前者の理由から融資を断わるかも知れない。というのも、前者は実質的な問題で、後者は形式的な問題だからである。ところで、これまでこの実質的信用にかかわるものだけが、関心の対象となるあまり、後者の方の問題が見落とされてきたといえるのではないだろうか。従って私は、この後者の方の隠蔽の側面を儀礼的な隠蔽と名づけ、ここでの考察の対象とするのである。

II　ジンメル社会学における外見のための隠蔽とゴッフマン

1　ジンメルの隠蔽論—表象の整序のための二つの社会的前提

ジンメルは「秘密と秘密結社」の中の序論とも言える部分において、私が儀礼的と名づけたタイプの隠蔽について、また別の観点からふれ、社会関係における隠された部分の存在の一般的普遍性や不可避性を論じている。

そこでは、ジンメルは個人が他者と相互行為する場合に他者に対して伝達する、あるいは伝達できることの一面性や断片性に着目する。我々が社会的場面において他者に表明できるのは常に「内面的な現実の目的論的に制御された変形」いいかえれば「心的過程から選択と整序によって様式化された断面のみ」に過ぎず、「いかなる

交流や社会も、他者についての目的論的に規定された無知に基づく[18]」と彼は言う。そして、正直か虚偽かという識別がなされる以前にこの絶対的前提が先験的に存在すると言うのである[19]。

2　感情の制御

このことを示す一つの観点は、我々自身が内面的には絶えず様々な動揺が沸き起こっている感情と衝動の被造物だということに由来する。ジンメルはこの様な人間の心的過程の非論理性故に、個人が他者と接して関係を取り交わす際には、表現のレベルで論理的な形に制御し、目的にそったものだけを取拾選択して残りは排除する必要があると述べる。人々は当然のことながら自らの内面の全てを他者に伝達したりはしないし、そんなことは不可能である。従ってそこでは何かの意図の介在のもとでの検閲が行われているのである。ゴッフマンは欧米においては平静さを保つことは社交上のエチケットであり、文化的な価値を与えられているということにしばしば言及する[20]。そして、そのことは少なくとも現代の日本においてもあてはまる。少々のことで動じない人間はすぐに感情的に動揺する者より一般に評価される。この様な事実は、こうした内面の自然の制御が時折非常に困難となるということを示すと同時に、感情を押し隠して、たとえ表面上でさえ、と言うよりはまさしくその表面上においてこそ、一定の外見に自らを係留しておくことが社会から求められているということを示しているのである。

確かに、この様な営みは、ジンメル自身が述べているように、通常の場合、人々が自然に、そして半ば本能的とも言えるやり方で行っていることであり、本来の意味での隠蔽、すなわち、意識的な隠蔽とは言えないかも知れない。しかし、そのようにして隠されているものは、ゴッフマンがしばしば看取したように、へたに当の場面内で露呈すれば、露呈した本人が恥をかいたり、信頼を失ったり、または人間関係にひびをいらせるといったことも起こりかねないこともある。例えば、高級レストランの厨房長は、客に聞こえる恐れのある場では、たとえボーイに対しても乱暴な言葉を発することを控えるであろう。彼への叱咤は、客からは隠された場所においてなされなければならない。もしそうしなければ、その場の存在意義の一部として共有されているなごやかで高級なイメージや雰囲気は台無しになってしまうのである。社会はその重要な一つの側面として、一定の気分を共有する共同体としての性格を強くもつ。もし仮に、ジンメルのいう人と人との交流の際の前提が、なにがしかの露見によって壊される可能性があるとき、個人は極力それを意識して抑えようとするであろう。

3　無関係なものの排除

そのもう一つ別の観点は、そこで達成されるべき目的が設定されているような社会的場面において、その目的と無関係な部分は、自然とまたは意識的に排除されるということである。人間が多くの社会状況において自らの目的を達するためには、その全てをさらけ出すことは不必要であるばかりか、有害な場合も多い。都会では、日用品を買物に行った見知らぬ店の主人に自分の身の上を語ることはおろか、その買物の目的を告げることすら、時には異様な感じを与

えることがある。あるいは、教師は教室で生徒に自分の私生活に関して長く語ることは不都合なことも多い。(教師に長い雑談をさせるというのは、生徒が授業からの逃避を試みるために常套手段として用いる手でもある。)

4　無関連のルールと隠蔽—無視のセット

ところで、これら二タイプ（感情の制御と無関係なものの排除）の隠蔽の観点は、ゴッフマンが『出会い("Encounters")』において無関連のルール(rules of irrelevance)[21]と呼んだものと対をなす。無関連のルールとは、当面の社会的場面の状況定義がいかなるパースペクティブを排除するかということに関するルール、言い替えれば、状況内において何を無視(disattend)すべきかを規定しているルールである。例えば、先ほどの日用品店の主人の例でいうならば、客が自分の私生活に関して話すのを避けるとすれば、店の主人の方も客のそうした個人的事情に関心を寄せたり詮索したりする態度を控えるのである。この後者を規定しているのが無関連のルールであり、従って、この例のような形で、これまでの隠蔽とは、いわば隠蔽—無視のセットをなしているのである[22]。しかし、だからと言ってその関係が機械的で冷たいものであるとは、一概にいえない。むしろ、その場に適した気のきいた会話を交わすことによって、束の間の心あたたまる交流を実現することもありうるのだ。また、ゴッフマンはこのルールについて、次のような例をあげている。「大きくて有名な店の店員達は、顧客たちの購買力のいかんにかかわらず、全ての顧客を同等にあつかうという倫理をもっている。「丁重なサービス」という語句は、店員が顧客に明らかな社会的差異があってもそれに関係なく、常に愛想と敬意を表してくれるものという世間の期待を指している[23]。」つまり、客がいかなる社会的属性を持とうが、商品を売るという当面の目的に関与しない限り、店員たちはそのことを度外視する、すなわち無視するのである。そして客が自分の社会的属性を隠しておきたいと思っている場合、特にこのセットが働くことで客は、当の社会的場面内では、より安全に、それこそ自分が価するより「よりよいイメージの中につかっている[24]」ことができるのである[25]。

5　外見のための隠蔽の二つの社会的要因

ジンメルを通じてこれまで考察してきた隠蔽とは、行為者が現時点で属している社会の一構成要素として自らの表象を整序するということに基づいている。しかし、彼はこれと関連して、外見のための隠蔽にかかわるさらに二つの重要なポイントを論じている。一つは、個人はその一断片において他者と接し、また別の他者には別の断片を示すということ、すなわち、他者性の類別化である。そして二つ目は、個人がそれぞれに他者が入り込めない固有の領域を持つということである。個々人は、先ほどの表象の整序のための隠蔽を含め、これら三つの要件が脅かされるときに儀礼的隠蔽を思い立つのである。

6　他者性の類別化

他者性の類別化について、ジンメルは「ある個人についての理論的な表象は、その表象をいだく立場にしたがって全く正当な仕方で

完全に異なったものとなるのであり、その立場は、認識されるものに対する認識するものの相対関係によって与えられている[26]」と説明している。一般に人間は、ある人に対して接するときの仕方と別の人に対するそれとでは、非常に異なっている場合が多い。もっとも顕著な例では、客に対してことさらにいんぎんな商人が店員に対しては厳格で高慢な態度をとるといったこと、あるいはまた、会社で取引先の人と会話をする態度と、友人の同僚と雑談するときの態度とは当然異なってくるといったこと等である。そして、このことはジンメルも主張しているよう決して必ずしも欺瞞とはいえない。なぜなら、個々の社会的場面においてそれぞれに適合した形の相互行為を他者と交わすことは、平生のの社会生活を営むうえで必要不可欠だからである。ゴッフマン的に解釈するならば、各々の社会的場面は常にそれ固有の仕方で秩序づけられており、しかもそのことは通常意識されもしなければ気づかれもしないのだ。

ところで、個々人の、ある社会的場面で示す断面と別の場面で示すそれとが相矛盾するとき、そしてしかも、一方の場面での彼の表明が他方の場面でのそれにさしさわりがあるとき、彼は、一方の場面で関係する他者から他方の場面での彼自身の表明を隠そうとするであろう。例えば、ゴッフマンは次のような例をあげている。「フランス系カナダ人の司祭の中には、友人と海水浴に行けないほど厳格な生活をおくりたいとは思わないが、しかし自分の教区の信者以外の人たちと泳ぐのが最善であると感じている人々がいる[27]。」オーディエンス分離(audience segregation)と彼が呼ぶこの社会的行為の特徴は、それぞれの場面で表明する相手を完全に分離しておくことで、その矛盾を解消しようとするものである。ボックによると、隠蔽は分離を前提としている。(「秘密」のラテン語であるsecretumは、もともと分離=separationを意味する語に由来している[28]という。)

しかし、ゴッフマンはさらに、このオーディエンス分離が、ただパフォーマー自身の要望と努力にのみ帰するものではないことにも注意を喚起している。つまり、たとえパフォーマーがこの様な分離を壊そうと試みても、オーディエンスはしばしばその様な行為がなされないことを望むのである。例えば「オーディエンスは、パフォーマーを職業上の見かけ通りである、つまりあたかもそのパフォーマーが彼の制服が示している以外の何者でもないかのように彼を扱うことができることで多くの時間と感情的なエネルギーを節約されていることを知ることができるのだ。二人の個人のあいだのあらゆる接触が、個人的な試練や悩み、そして秘密の共有を伴うものであったなら、都会生活も人によっては耐えがたい程にべたついたものになるだろう[29]。」スーパーマーケットのレジでいちいち自分の事柄を話さねばならなかったり、相手の近況を聞かねばならないとしたら、おそらく多様で煩雑な人間関係の中で暮らしている都会人に取っては、しばしば苦痛となるであろう。オーディエンス分離は、時にはオーディエンス側も期待することなのである。

他者性の類別化は、既に明らかなようにジンメルが最初にあげた前提と非常に関係が深い。すなわち、それは人間が一断面の整序さ

れた表象によって他者と関係を結ばざるを得ない、という都市生活者的な関係原理から派生する社会特性の一つなのである。しかし、次の点を断っておく必要がある。すなわち、これまで他者性の類別化の特性を、特に明確に示すために極端に断片化された関係だけを例としてとりあげてきた。しかしながら、この様な関係特性は必ずしもそうした狭い範囲に限定されるものではない。むしろ程度こそ異なれ、あらゆる関係の一側面をなすともいえるのである。ジンメルは次のように主張する。「我々自身が最も親しい者のみにもらすのも、量的な点に関しては、我々の実際の内的生活の断片であるのみではない。さらにそれはまた、右の事実性をいわば程度に応じて代表する選択でもなく、かえって理性、価値、聴衆との関係、彼の理性力への顧慮といった観点から生じた選択なのである[30]。」つまり、親しい者との関係を含めてあらゆる社会関係において行為者は、その場面に応じて意識的にまたは無意識的に自らの表象を構成しながら相互作用しているといえるわけであり、その構成原理と矛盾したり、それにとって無用であるものが選別されて、無意識的には排除され、意識的には隠蔽されるのである。従って他者性の類別化は、いかなる場面についても多少はありうることなのである。これはいわば隠蔽の問題というよりはむしろジンメルのいう社会化の問題と関連するので、この点に関してジンメルの別の著作を参考にして少し補足的な解釈を試みたい。

ジンメルは、社会化形式のもっとも純化された形を社交という社会的場面にみた。そして、彼は、「社交[31]」においても、これまでこで論じてきた社会関係における個人の断片性を踏まえた論点を語っている。「いってみれば、全体としての人間というのは、様々な内容、力、可能性の、まだ形のないコンプレックスで、生活の変化から生まれる動機や関係のままに、分化した明確な構成物に形作られて行くのである。彼は、経済的人間として、政治的人間として、家族の一員として、ある職業の代表者として、そのとき必要に応じて構成された作り者になるともいえる[32]。」そして彼は、社交においては、人間は社交的人間になるというわけだが、その社交的人間とは、さまざまのリアティー（特に個人的なそれ）の排除のもとに形成されるのである。

ではその構成原理の根幹となっているものとは一体何なのか。それはただ単に目的達成のための合理性といったことでは説明しきれない。例えば、社交の場合についていえば、それは「社会化の遊戯的形式[33]」である。そこでは個人は何の抑圧も受けることなく、自らの自由意思によって導かれた配慮と遠慮をもって、いわば理想的な社会空間を築き上げる。社交において人々は、しばし現実の雑事や目的を離れ、ただ他者とのたわいない交流を楽しむのである。それはあらゆる現実の目的とは異なる原理のもとで生み出される。つまり、その社会空間を作り上げることそれ自体が自己目的なのである。ジンメルは、「社交」における議論をこうした遊びの領域に限定する。しかし、ゴッフマンは、この点に関して次のようにジンメルを批判する。「社交術を、真面目な生活の込み入った状態ときっぱり切り離された単なる一種の遊びとして扱おうとする迷惑なジンメルの

努力は、社交術における無関連のルールが生活の真面目な領域における同様のルールと同じものであることを社会学者たちが見過ごしてきてしまったことに対し一部は責任があるだろう[34]。」では、込み入った実際の生活において、無関連のルールをもたらしている原理とは一体何なのか。(現実の目的達成とも間接的にしか関係しないにもかかわらず、このような遊びでもない、しかも多くの多様な社会関係の中に浸透しているような別の構成原理とはいかなるものなのか。)ゴッフマンはそれを現実の社会関係における儀礼的ともいえる側面にみるのであるが、この点に関係するもう一つのポイントを、やはりジンメルにそってみておくことにする。

7　タブーの領域

二つ目のポイント、すなわち他者がはいりこめない個人の領域について、ジンメルは「一切の人間の周りには観念的な、ある領域がめぐらされていて、・・・人々は個人の人格価値を破壊することなしには、そこへ侵入することができないという感情[3]。」をもっていると述べる。彼は、この領域をめぐらせるのは名誉であるという。それは狭義には、個人の人格の尊厳を保護するプライバシーの問題と受け取ることができる。ところが、プライバシーは、しばしば純粋に個人の私的権利の問題にされがちである。確かにそれは、個人の自由と権利の保護という文脈の中での重大な社会問題だといえるだろう。国家あるいは私企業等の個人に関する情報の濫用の危険に代表される社会問題の重要性は、その権利の持つ社会的意義のただならぬ大きさを示している。ところが、この領域の問題をこうした個人の権利の問題にのみ帰することは、個人の人格や名誉の感覚、そしてまた、人々が日常的交わりの中で感じる他者の領域へ踏み入ることへの遠慮の感覚が説明できない。そして、問題を個人の権利としてのプライバシーに限定してしまうとき、なぜ各々の個人のプライバシーが社会的に保護されねばならないのか、ということについての社会学的見解が明確になってこない。結局それは個人の様々な意味で権益を保護するための重大な権利だからだというトートロジーに落ち着くのが関の山である。諸個人の相互作用が生み出す社会関係にとって、あの個人の領域はいかなる意味を持つのか、ということを考えるには、これとは別の観点が必要なのである。

ボックは、秘密を定義する際、それが持ついくつかの特性をあげているが、その中で、一つは先ほどあげたように秘密＝secretの語源とも言えるseparation＝分離であるが、さらに別の二つは、プライバシーと神聖＝sacredである[36]。そして、神聖とは、示唆的にもラテン語で秘密を意味する言葉arcanumのもう一つの意味である。このことは一つには、「一定の秘密への侵入が引き起こす冒瀆の感覚[37]」に、見て取ることができる。しかし別に神秘主義的な意味あいをこめて、これを考えようと思っているのではもちろんない。われわれが、日常、他者の領域あるいは自分の領域の侵犯に関して、ふと感じるような、タブーの感覚について言っているのである。

確かにこうした領域は、積極的に隠蔽されるものではない。それは別に秘密でもなんでもないことが多い。しかし、露見の危機にさらされれば隠される。そしてまた、他者からも遠慮や配慮によって

守られるべきものである。

ゴッフマンは、デュルケイムの影響のもと、主として『相互作用儀礼("Inetraction Ritual")』の中で、人格の領域の聖性に言及している。すなわち、個人の人格を集合的マナの配分とみる彼は、デュルケイムを引用して次のように述べる。「人間の人格は神聖なものである。人はそれを冒瀆したり、その境界を敢えて犯してはならないが、その一方で同時に、最善であるのは、他者と交流することである[38]。」つまり、人間は他者の境界を踏み越えてはならないが、同時に交わらねばならないのである。これらの、一見、対立的とも見える二つのことが、同時に満たされるのは、ゴッフマンによれば、諸個人の互いの儀礼的な呈示行為においてである[39]。従ってそれは、かなり外面的で表層的なレベルで達成されるものということになる。そして、諸個人間の相互作用において直接的に神聖性を持つのは、個人の体面(face)である。こうした互いの神聖な体面を守ることで、一定の表出秩序を保つという行為の側面が、ここで言う儀礼なのである。

つまり、ゴッフマンに則していえば、個人の自らの人格の神聖さとは、結局は他者からの神聖さである。個人の名誉とは、元来極めて外見的なものであり、つきつめて言えば、他者からの名誉である。個人の領域を守るための距離とは[40]、当然他者との距離であり、対極点としての他者なしでは考えられないものである。しかも、人間の他者からの領域が問題となるのは、主として他者と外見によって接しているときである。従ってそれらは、対面中のお互いの象徴的行為によって表明されると同時に確認されるものだと言えよう[41]。この故に、人格の神聖性と体面とは重なるのであり、個人にとって体面は決定的に重要となるのである。ところが、このことは個人にとってのみ重要なのではない。個人は社会的場面において、社会的自己を投企して社会を形成している構成員[42]であり、互いの体面を保つ行為とは、集団統合のための社会的実践なのである[43]。従って、個人が自分自身の行為の象徴的意味を守る営みとは、個人が社会的人間として持つ外見や、行うことの外見の象徴的意味を守ることであり、それ故に社会的に重要なことなのである。そして、このことは、諸個人の互いの体面保持が、協力的に、あるいは共謀的になされているという現実の相互作用のうちに如実に看取することができるのである。

かつて個人のこうした象徴的意味は、かなり文化的に確定された自明性の中で守られていた。個人は確固たる自らの社会的位置づけを持ち、自らの外見の神聖性は社会のそれと融合した形で存在し、個人はそれに気をもむこともなかった。ところが、個人がこうした社会のくびきから解き放たれ、自由を得るとともにそれは個人が守らねばならない次元へと移ったのである[44]。ヘプワースが暗に指摘した「個人の外見的死は社会的死である[45]」という事態の本当の意味は、単に個人の信用の失墜という実質的問題に帰されるのではなく、より深い聖的とも言える問題にも直結しているのである。現代社会において、人間は、様々な場面に身をおくだけでなく、錯綜する多元的な価値観にさらされて、二重の意味で隠すことを迫られて

いる。すなわち、一つは、自らの実質的信用を確保するためであり、もう一つは自ら社会の成員たりうる資格を得るための象徴的意味の保全のためである。

III　ゴッフマン社会学と隠蔽

1　「見せ方」の社会学として

ゴッフマン社会学の大きな特徴の一つが外見の重視であることは、周知の事である。彼は人間の行為が何をなすのか、いかなる内容を持つのかということよりもむしろ、どう見えるかということを執ように追求した。従って彼は、行為の「見え方」と「見せ方」に着目したといえるだろう。

しかし、彼の社会学の特異性は、とりわけその「見せ方」の重視にある。彼は、個人の表出行為は個人自らが意図する一定の意味解釈をうるためには、「見せる」ことも重要であると考える。そして他者からなんらかの社会的意味づけを以て扱われてこそ個人は一個の社会的人格として他者の前に登場することとなる。「見せる」とは、いわゆる広い意味での印象操作のことであるが、個人の行為をこの様にみてゆく彼の視角は、「汚いマキャベリ的マニピュレーター」といった言葉に代表されるように、しばしば誤解にみちた汚名を被っている。しかし、(彼が言わんとするように)人間は、他者のまなざしにとっては解釈されるべき記号に過ぎないと考えるなら、記号搬送体(sign vehicle)という側面を持ち、その身に意味の衣をまとっている限り、場違いな服装は避けたり、時には着飾ってみるのも当然の人間的営みと言えるだろう。あらゆる対面的状況には、多かれ少なかれ、独自の「状況適合性のルール[46]」が暗黙のうちに協定されている。そしてあの意味の衣は、間違ったりしくじったりした場合、見せるどころか見えなくなってしまう性質のものなのである。まっとうな意味の衣を着けない人間は、社会的にはまるでいないかのように扱われることすらあるのである。

見せることとは、何も積極的に自らを売り込んだり他人をだましたりすることとは限らない。むしろ個人が他者と共存し、相互作用している一定の社会的世界を壊さないための「見せ方」も重要なのである。人間が意味的動物である限り、対面的社会は共有されたシンボリックなシステムという側面を持つ。個々人は皆その中の構成要素としての役割を担っているのである[47]。そうした役割の全うこそが、社会のただ中におかれた際の個人の「見せ方」の主たる決定要因とも言えるのではないだろうか。つまり、「どう見せるか」は、結局は「どう見えるか」によって規定されているということになる。

2　社会化と隠蔽

従って、彼がこの様に個人の「見せ方」を重視したことは、彼が『相互作用儀礼("Interaction Ritual")』や『集まりの構造 ("Behavior in Pubric Places")』などの著作で、マナーやエチケットといったような社会的に規定された形式的な表現行為を、特に研究の素材や対象として用いたこととほぼパラレルなのである。「見せる」こととは、自らの外見や表象行為が持つ象徴的意味を状況に適合させ

る一種の社会化である。個人は、ただ単にその様なルールを押し付けられるのではなく、主体的にそれを見せることによって、一定の社会関係を保とうとし、あるいは社会に取り入ろうとするのである[48]。そして、しばしばその意味をより強化して呈示し、自己が本来持っている以上の社会的価値を得ようとすることもあるだろう[49]。しかしそういったことは、非常に興味深いとはいえ、主体的社会化ゆえの付随的現象なのである。但し、ここでの社会化は、ジンメルが「社交」において展開した「社会化の遊戯的形式」とはいささか異なる。個人は、この場合、より広い社会的現実の中で、少なからず社会状況全体からの抑圧と統制を受けながらそうしている、いわば「社会化の儀礼的形式」とでも言えるようなものである[50]。

ところで、主体的に見せているということの背後には、常に隠蔽が暗示されている。つまり、意識して見せているのだということを示すためには、何かを隠しているということが示されねばならない。ゴッフマンの洞察の多くは隠蔽暴露的な手法によっているのもこのためである。彼が『自己呈示』において、社会状況を「おもて局域(front region)」と「うら局域(back region)」とに分け、前者から隠された領域としての後者を考察の対象としたのも[51]、決して「おもて」がにせもので「うら」が本物といったことを示そうとしたのではなく、いかに「おもて」が、パフォーマーの見せることによって築かれているかを示すためであった。また、主体的という言葉に、本物の自己という意味あいを込めようと思っているのではない。この「おもて」と「うら」とのギャップに、自己のようなものを垣間見ることができるとしても、それ自体はどうでもよいことなのである。つまり、「おもて」は、文化的に共有された表象ルールによって規定された世界であり、そうした標準化を通じて、それの相互作用秩序は保たれている。このルールは通常、余りにも自明なものと見なされているのでその存在すら気付かれないことも多い。要するにそれでも、それは、社会文化的にしろ個々人がつくりあげているという事実が重要なのである[52]。そして、そのことは、隠蔽と表裏一体をなしているのである。

3　ゴッフマンの社会

確かに個人の「みずから」行うことが、常に「おのずから」社会適合的であるといった、まさに孔子の境地のようなことが、一つの理想的状況であるかも知れない。しかし、人間が既に自然の摂理から見放され、不完全で、恣意的に構成された世界に住んでいることを考えると、われわれ一般の人間にとって、そのようなことが不可能であることは言うまでもない。ましてや、あらゆるルールや慣習、コンベンションを排除した自由な社会という幻想的なユートピア主義は、彼がその未熟な楽観主義ゆえに忌避したものであった[53]。彼は、むしろ適合的な形で「見せる」ことを人々が共謀することでつくりあげられた対面的社会状況、すなわち、集まり(gathering)やエンカウンターに、現代都市社会の共同体の客観的な姿を見たのであった[54]。

そのようにしてつくりあげられた社会的世界とは、個人が、個々の社会的状況においてその場にふさわしいと考えられる、言い替え

れば、他者から適合的であると解釈される記号を、外装（服装その他の装備）の上でも表象的行為の上でも身にまとって参加することで築き上げている共謀的自己呈示の世界である。そして逆に言えば、その世界は、個人の呈示を状況定義の統合の要素としつつ保たれているのである[55]。従って、そこに参加している個々人が自らの体面を保ち、一定の象徴的意味をそれぞれ持ち続けることは、個人のみならず社会状況全体にとっても重要なことなのである。（それ故、適合的な呈示のためのある程度の罪のない嘘や隠蔽は社会的に容認されているのであり、またジンメルも述べたように、嘘はときには社会統合の要素となるのである。）

4　社会的世界の脆弱性

しかし、その様にして築かれている社会状況は、しばしば繊細でもろい性格を持つ。つまり、不安定な感情の揺れと衝動を持ち、多様な社会的場面でそれぞれの呈示を行い、また、当の場面にとって不都合な情報をしばしば持ち、しかも時には失敗もする個々人の呈示は、まさしく「繊細な壊れもの」である。そして、それによってこの社会的世界は保たれているのである。しかも、ドラマの舞台での役者の呈示の失敗がそうであるように、現実の社会的場面での個人の呈示の失敗は、往々にして社会状況全体に波及し、その社会的世界が持つ一種のリアリティーを不信にさらす。従って、そうしたリアリティーの世界は、そこで協同で呈示を行っている人々を結びつけるものであると同時に[56]、個々の成員の表層的な呈示によって張りめぐらされた薄膜のような構造を持つものなのである。そして、ゴッフマンは、豊富な実例をもとに、社会関係が本質的に成り立つ基盤としてのこうした構造をつまびらかに示したのであった。

5　外見としての隠蔽へ

この脆弱な社会的世界が保たれるのは、一方では、勿論各々の行為者＝パフォーマーが、状況適合的に、そして作業的に、一義化した呈示を試みるからであり、その試みのための重要な手段の一つは、これまで見て来た隠蔽である。彼らは、その場にそぐわないような何等かの表明を極力避けようとするだろう。しかし、他方、それを見る側＝オーディエンスの協力も見逃せない。彼らは、そうした一義化に背反する情報を、例えばパフォーマーのふと漏らした表出の中に見いだしたとしても、それが有害な可能性を暗示していないか、または制御可能な場合は、見えないものとして、あるいは、見て見ぬふりをして済ませる。これは先に二章でふれた隠蔽―無視という社会的行為のセットと同じであるが、この様な協同作業はたいていは、その場面限りの合意、すなわちワーキングコンセンサスに基づく。そしてこのことは、この様な互いの呈示の象徴的意味を相互に保護することで保たれている社会関係、すなわち外見において保たれている社会関係の儀礼的な側面をてらしだす。というのも、外見から隠すべきものは、ただ外見からのみ隠されればいいということを、この協同作業は示しているからである。つまり、オーディエンス自身も実際は知っていることを外見から排除することで、実はパフォーマーと共謀した外見の世界を築き上げてしまっているのである[57]。言い替えれば、そこに、個人の外見のための隠蔽が、他者から

の外見としての隠蔽（他者は外見においてそれが隠されているということを装っている。）によって支えられているという、一つの表層的儀礼的社会関係、あるいは社会的結合のパターン（すなわち、それが個人の持つ別の情報と矛盾する場合でも、その場面で構成されたものを一応尊重して関与し、結合するという）の典型を見ることができるのである。

しかし、互いにある程度は隠蔽していることを相互了解しながら成り立っている社会的世界は、その秩序がこの様な相互協力によって保たれねばならない脆弱性を持つと同時に、別の意味も持つ。すなわち、個人が現に表明していることは、必ずしも字義通りではないということを、常に表象が含みとして持つことで得られるゆとりと柔軟性である。例えば、他者の表明が単なる平板なものではなく、常に隠蔽の可能性をうちにはらむことでうみだされる落差の存在感は、個人の神秘性と魅力を増進する。ゴッフマンの有名な概念である役割距離も、見ようによっては個人の隠蔽そのものの表明である。つまり、自分が現に投企している役割以外の役割を実は隠しているのだということの自己呈示なのである。また、ジンメルは信頼を不可知なものに対していだかれる感情であることを洞察した。つまり、不可知なところのない人間がいるとしたら、その人は決してそうした感情の対象とはならない。これらのことは、しばしば人間関係に深みと潤いを与え、より豊かな関係の創出へと導く。しかし、その様にして築かれる関係性の世界は、儀礼的であるにもかかわらず、遊びへと傾斜したものとなっている。つまり、表層の秩序は保たれつつも、どこかパロディー化されているような様相を呈しているといえるのである。

注

(1) Mike Hepworth, *Blackmail*, (Routledge & Kegan Paul,1975),pp.61—62.
(2) *ibid.*, p. 8.
(3) *ibid.*, pp.9—19.
このことを簡略に記しておくと、
一六〇一、泥棒の一形態、一七九六、personへの傷害とcharacterへの傷害の分離
一八四三、社会的危険として公式に認識、一八八五、全体社会にとって有害な個人への犯罪、一九一六、世評脅迫は国家への新たな脅威、一九六六、正式に犯罪として認定。
(4) Hepworth,*op. cit.*,p.15.
(5) *ibid.*,pp.21—22.
(6) 尾吹善人、「取材源の秘匿と表現の自由」、『別冊ジュリスト』憲法判例百選第三版、芦部信喜編、有斐閣、一九七四、六八頁。
(7) 但し、公共の利益に反する場合はその限りではないというのが通例のようであり、この判例の場合もそうであった。詳細な前掲誌。あるいは、ボックもアメリカの判例から「公共の危険が始まるとき、この特権は終わる。」としている。Sissela Bok,*Secrets*,(Oxford Paperbacks,1986.)p.128.
(8) S。ビリントン、『道化の社会史』、石井美樹子訳、一九、五五頁。
(9) Bok,*op. cit.*,pp.40—44.,PP. 81—83.
(10) *ibid.*,p.36.
(11) *ibid.*,pp.94—98.
(12) このことについての実例の一つは、小此木啓吾、『秘密の心理』、講談社現代新書、一九八六、一六一—一六三頁。
(13) Georg Simmel,*Soziologie*,(Dunker & Humblot,1908),P.262.居安　正訳、『秘密の社会学』、世界思想社、一九七九、一七頁。

(14) 秘密とともに嘘の研究も行っているボックは両者を比較してこのように論じている。Bok, *op. cit.*, p.xv.

(15) 相互作用の秩序は、ときには「正直にふるまわない」ことによって保たれているということを、相互作用儀礼の分析は暗示しているという指摘は、ここでは特に示唆的である。井上俊、「うそ現象へのアプローチ」、仲村・井上編、『うその社会心理』、有斐閣選書、一九八二、二四頁。

(16) 藤竹暁、「日航機事故現場写真」、『書斎の窓』、No.三五〇、一九八五年一二月号、出典は、Helen MacGill Huches, *News and Human Interest Story*, (University of Chicago Pless,1940)

(17) Simmel,1908,*op. cit.*,p.263.訳二〇頁。

(18) *ibid.*,p.259.訳一〇—一一頁。

(19) *ibid.*,ここでは、ジンメルが前掲書で主題とした社会形式としての秘密には言及しない。ただ彼の洞察をここでのテーマとの関連で利用するにとどめる。

(20) 彼のいう精神の官僚制化はその一つであり、さらに彼は諸著作において社会的価値としてのpoise（平静さ）について随所で言及する。

(21) Goffman,1961,pp.18—24.訳五—一四頁。

(22) ゴッフマンは、"*Encounters*" においては無視(disattend)という言葉を余り使用していないし、またこうしたセットとしても言及していない。但し、「私が示唆したように、出会いの特徴は部分的には、無関連の、枠組みから外れた、或は、起きるはずないと見なされるべき状況の諸特性をどの様にルールづけるかということに基づいている。これらのルールに従うということは、プレーをフェアに行うということを固守することなのである。そうすれば無関連である明白な出来事は無視される。」とある。p。二四。訳一三頁。無関連なものを無視するといった議論は、主に"Frame Analysis"において展開されている。Goffman, *Frame Analysis*, (Torchbooks,1974.)pp.201—210.

(23) Goffman,1961,22.訳一〇頁。

(24) Goffman, *Interaction Ritual*, (Anchor Books,1967)p.83.

(25) Goffman,1961,p.19.訳六—七頁。無関連のルールは、もちろん人間の社会的属性に関してのみ適用されるのではない。それは、当の社会的場面(encounter)における認識の全てに及ぶのである。例えば、瓶の蓋を駒に見立ててオセロをしたとしよう。ゲーム中はそれはあくまで駒であって、参加者はゲームに熱中している限り、それを瓶の蓋だとは見なさない。参加者たちによって築かれたゲームの世界においては、そうした属性は無視されねばゲームは成り立たない。しかし、一度ゲームが終ってしまうと、それは再び瓶の蓋となり、無造作な扱いを受けるのである。ゴッフマンは、こうした「世の中のほとんどの事物に対して示される、この非注意(inattention)の構造の優雅さと力強さは、人間的諸性向からなる社会組織に対する偉大な貢ぎものである。」(Goffman,1961,p.19.)と述べているが、このことは、このルールが行うのは、先ほどの社会的属性の一面化も含め、記号搬送体である人間の外見を含めたあらゆるものの外見＝記号の一義化ともいえるのである。

(26) Simmel,1908,p.257.訳四頁。

(27) Goffman, *Presentation fo self in everyday life*, (Penguin Books, 1959.)p.137.石黒毅訳、『行為と演技』、誠心書房、一九七四、一五九頁。

(28) Bok, *op. cit.*, p.6.

(29) Goffman,1959,p.57　訳五六頁。

(30) Simmel,1908,p.259.　訳一〇頁。

(31) G。ジンメル、『社会学の根本概念』、清水幾太郎訳、岩波書店、一九七九。

(32) 前掲書、七六頁。

(33) 前掲書、七四頁。

(34) Goffman,1961,p.21.　訳八—九頁。

(35) Simmel,1908,p.265.　訳二四頁。

(36) Bok, *op. cit.*, pp.6—7.

(37) *ibid.*, p.6

(38) Goffman,1967,p.73.また、『自己呈示』においても同じ箇所を引用し、さらに「自分より上位の地位のパフォーマーに対して畏敬と距離を感じることはいうまでもないが、同等のおよび下位の地位のパフォーマーに対しても同じくらい畏敬と距離を感じる」ということを明確にしておかねばならな

いと論じている。Goffman,1959,p.76.訳八〇頁。

(39) ここでは、テーマの関係上ゴッフマンが『相互作用儀礼』において主として展開した相互の積極的な儀礼的呈示、特に丁重(deference)や品行(demeanor)に全くふれることはできない。ただその結果として実現される体面の神聖性に言及しうるのみである。

(40)「人の体面は神聖なものであり、体面を維持することを要求されている表出的秩序はそれ故に儀礼的なものである。」Goffman,1967,p.19.

(41) それは互いの象徴的表象を尊重する儀礼的行為、丁重(deference)と品行(demeanor)の協力的交換において実現するのである。「各々の個人は自己の品行方正なイメージと他者の丁重なイメージとに責任があるのである。だから完成した人にとって、諸個人は儀礼のチェーンによって手を結ばねばならない。」*ibid.*,pp.84—85.

(42)ゴッフマンは人間の社会を、表明と支持との相互交換のプロセスの所産とみる。そして、この視角の根底には、道徳的個人主義のみが、社会と個人の両方を満足させるというデュルケミアン的なものの見方がある。つまり、デュルケイムが、儀礼的行為を人間と社会とを媒介するものとしてみたように、ゴッフマンは、世俗化されてはいるが、相互作用の秩序を保ち、社会統合を果たすような、行為の表層の象徴的側面に儀礼的なものを見たのである。この点に関しては、Jack N.Mitchel, *Social Exchange, Dramaturgy and Ethnomethodology*, (Elsevier NorthHolland,Inc.,Thomond Bllks,1978.) pp.95—106.参照。

(43) Goffman,1967,pp.84—85.

(44) この点に関しては、綾部恒雄、「未開と文明の秘密結社——アフリカとアメリカのばあい」、『現代のエスプリ』九〇秘密結社、二〇六—二〇八頁参照。

(45)ヘプワーズは脅迫を道徳的殺人(moral murder)と呼ぶ。Hepworth,*op. cit.*, pp.21—22.

(46) E。ゴッフマン、『集まりの構造』、本名・丸木訳、一九八〇、二七頁他。

(47) 例えば、"Encounters"の中で、「個人は状況の統合の部分となる」(p.35)といい、そのために個人は自分が参加しているゲームに関与していることを常に示している義務が生じてくることを論じている。(pp.35—38)

(48)ゴッフマンは、人間関係そのものの成り立つ前提条件としての社会的儀礼化(social retualization)があることを論じている。Goffman,"The Interaction Order",in American Sociological Review,Vol.48,1983,p.3.

(49) 例えば、ゴッフマンが『自己呈示』において論じている「劇的現実化」(dramatic realization)、「理想化」(idealization)や「神秘化」(mystification)などがそうである。Goffman,一九五九,p.40—82.訳三九—八九頁。

(50)『相互作用儀礼』に、「人間は外部から押し付けられた道徳的ルールにからつくられる一種の構成物になる。」とあり、また同じ箇所に、「道徳的にルールによって縛られることの一般的能力は、個人に属して当然であるが、個人を(社会的)人間へと変換するルールの特定のセットは、社会的エンカウンターの儀礼的組織において確立された要求に由来する。」とある。Goffman,1967,p.45.こうしたゴッフマンにおける個人の道徳的社会化観は、以後『枠組分析』に至る一連の著作の中に見うけられる。

(51) Goffman,1959,pp.109—140. 訳一二四—一六三頁。

(52)まさにそこには、見せかけと隠べいとの二重性がある。見せかけは表出する方法でもあり、隠す方法でもある。

(53) Frederic Jameson,"On Goffman's Frame Analisys",in Theory & Society,Vol.3,No.1,1976,p.122.

(54) 大村英昭、「ゴッフマンにおける〈ダブルライフ〉のテーマ——演技＝儀礼論の意義——」、『現代社会学』一九、Vol.11,No.1, 1985.pp.9—16.

(55)もちろん、さらに統合の要素たる個人は儀礼的呈示を戦略的に用いて周りのものをだしぬくこともできる。しかし、この側面はここでは議論が煩雑になるので論じることを避け、既に述べたように秩序が呈示によって保たれるという点にのみ論究する。

(56)『枠組分析』におけるフレームは、一定の社会世界にリアリティーを与える解釈枠組みであると同時に、社会状況に入る際に個人が依拠すべき呈示の規範をもたらすものであるが、そのフレームの維持はそのリアリティーにとっても当の社会状況の社会的結合にとっても決定的である。Goffman, 1974, pp.345—346.

(57)ゴッフマンは、我々の人間性についての信念を維持するための一般的共謀にフレーム化の実践が用いられることに言及している。*ibid.*, p. 566.